



国際交流員の活動日誌

vol.73



2月に滋賀県へ国際交流員の翻訳・通訳研修に行ってきました。滋賀県に行ったことはなかったもので、楽しみにしていました。結局一日中の授業が終わってから数時間の宿題がありましたので、観光する時間はなかったのですが、代わりに言葉の力を顧みる時間がたくさんありました。

言葉はどんな形でも他人とコミュニケーションを取るための道具です。複数の言語を学べば、話したり、絆を作ったり、討論をできる人の数が増えます。そして自分が感じていることを形作ったり彩ったりできる言葉も増えます。言語を学ぶ時は、まるで世界

を新たな目で見ているような感覚がします。くだらないと思えることでも、いつもの見慣れた景色でも、今まで表せなかった色や感情を表現することができます。

例えば、私は「遠慮のかたまり」という言葉が大好きです。関西の言葉で、複数人でも食わずに残してしまうことです。もちろんアメリカ人でも無意識に「遠慮のかたまり」が生じますが、英語ではそれを表現する言葉はないので、何回も見えてきた現象に名前を付けることができてうれしかったです。言語を学ぶのは怖いところもあるかもしれませんが、世界が広がる以外にも、良いことが山ほどあります。いくつになってももう遅いということはないのでぜひ学んでみてください！（ララ）

地域の魅力 ふる里再発見

にしはら 月舘町西原遺跡の世界 - 3 - ～縄文人の食～

令和4年度第3回企画展
収蔵資料展「西原遺跡」
3/31金まで
伊達市保原歴史文化資料館



西原遺跡から出土した石器

縄文時代は、主に植物採集、狩猟、漁撈（魚をとること）の三つの活動によって、食べ物を得ていたと考えられています。

縄文人は、季節ごとに山野に自生するさまざまな植物を採集していました。特に秋に採集する木の実類は、主食といえるほど重要なものでした。現在でも食べられているクリ・クルミのほか、ドングリ類（ナラ・カシ・シイなどの実）やトチの実の殻が縄文時代の遺跡から発見されています。ドングリ類やトチの実はその

まま食べることができないため、縄文土器の中で水と灰を混ぜ、煮てアクを抜いていました。他にもカヤ・ヤマモモ・サンショウ・ヒシ・ノビルなどの植物が遺跡から発見されています。

狩りの獲物で最も多いのがシカとイノシシです。狩りは主に冬に行われます。夏は木々の葉が繁り、獲物が発見しづらく、また子育ての時期であるため、この時期に捕ってしまうと数が減ってしまうからです。遺跡から多数の矢じりが発見されたことから、主に弓矢を使って狩りをしていたことがわかっていきます。

一方で魚は、種類を組み合わせれば、1年を通じて毎回一定の量を獲ることが出来ます。そのため、動物質の食べ物のうち、獣よりも魚が占める割合が高かったと考えられます。日本人の食べ物として魚が身近なのは、縄文時代以来の伝統といえるかもしれません。